

# エックハルトとベギンの神秘主義の比較

—シュヴェスター・カトライを手懸りに—

## Comparison of mysticism of Eckhart and Beguines —Using “Sister Catherine” as a clue—

中川 憲次  
Kenji Nakagawa

### はじめに

マイスター・エックハルトの神秘主義と、その説教の聴衆であったベギン会修道女の神秘主義との間には、如何なる共通点、あるいは相違点があるのであろうか。本稿で、我々はマイスター・エックハルトと思しき人物が聴聞修道士（中世高地ドイツ語では *bichter* = 英語では *confessor*）として登場し、その霊的な娘であるカトライと対話するという形で記されている、『シュヴェスター・カトライ』という文書を取りあげたい。そこには、井上ひさしの「パロディーは歪んだ鏡である<sup>(1)</sup>」という言葉の借用するなら、1300年代のベギン会修道女の信仰的実存が、たとえ「歪んだ鏡」としてではあっても映し出されていると考えられるからである。そこで我々は、『シュヴェスター・カトライ』の重要と思しき部分を検討した上で、エックハルトのドイツ語説教に示されている神秘主義的信仰と比較してみたい。

### 1 『シュヴェスター・カトライ』について

#### 1.1 著者と成立年代

『シュヴェスター・カトライ』についての先行研究で重要なものは、ロバート・ラーナーのそれであろう<sup>(2)</sup>。ラーナーは、この文書が異端とされた自由心霊派から出たものとしている。また、この文書は中世高地ドイツ語 (Alemannic) で書かれたもので、後にラテン語

や、その他のゲルマン語に翻訳されたという。1356年にラテン語に翻訳したのは、ベネディクト会の修道士オズワルド (Oswald) である。彼の翻訳したものは生き残らなかったが、しかしそれは、15世紀にドイツ語に翻訳し返されたという。そのうちの二つの手稿はオズワルドの前書きを含んでおり、その前書きの中でオズワルドは、この『シュヴェスター・カトライ』という作品が単純な一般信徒が読むのに適した「いくつかの謎めいた言葉 (*etlich subtil sprich*)」を含んでいるので、翻訳に着手したのだと説明しているという。ただ、オズワルドはこの作品の最も衝撃的な部分の衝撃を和らげるように翻訳しているともいう。以上のような紹介の後、ラーナーは、オズワルドが1300年代半ばに活躍した修道士であることから、『シュヴェスター・カトライ』の成立年代も1300年代半ばであろうと推定している。また、主人公のカトライがシュトラスブルクから来ていることと、マイスター・エックハルトが1314年から1323年までの9年間シュトラスブルクに滞在していることから、この文書の著者はシュトラスブルク出身の者であろうとしている。結局、『シュヴェスター・カトライ』の著者については不明であるが、1300年代半ばの作とされるところから、マイスター・エックハルトでないことは確かである。エックハルトは1328年には死んでいるからである。その後の研究でもラーナーの説を覆すものは出ていない。最近ではバーバラ・ニューマンが『男らしい女から女のキリストまで From Virile Woman to Woman Christ』という著書の中で一つの章を割いて『シュヴェスター・

カトライ』について述べているが、彼女もまたラーナーに依拠しつつ、エックハルトが1314年から1323年まで滞在したシュトラスブルクにいた人物が著者であろうといい、また、内容上のいくつかの特徴から、著者は女性であろうともしている<sup>(4)</sup>。

## 1.2 梗概

我々は、バーバラ・ニューマンに倣って、この物語を7つの枠物語に分けたい<sup>(5)</sup>。それによると、おおよそ次のようなことになる。

- ①カトライと聴聞修道士の出会い
- ②カトライと聴聞修道士は、十字架の道が神に到達する最も近道であるということに同意する。ただ聴聞修道士は、十字架の道が女性にとっては過酷だと主張してカトライと言い争いになる。
- ③聴聞修道士はカトライに「苦」の価値について説き、カトライは去る。
- ④カトライは苦を体験し天使かと思ふ姿となって、聴聞修道士の前に現れる。
- ⑤カトライは更に進歩を遂げ、ついに「神になり」、三日間、神秘的な死を味わう。
- ⑥聴聞修道士はカトライの娘らしい要求を充分に受け容れつつ、彼女の指示を求め、後、神秘的な対話を為す。
- ⑦カトライとの対話の結果、この聴聞修道士も「神になる」ことを求めるようになる。しかし、カトライは、まだ聴聞修道士には「神になる」準備が出来ていないと言って、押しとどめる。

## 2 『シュヴェスター・カトライ』とエックハルトの言説

『シュヴェスター・カトライ』の梗概の中で、我々がとりわけ重要だと考えるのは、まず②の内容である。すなわち、バーバラ・ニューマンも指摘しているが、この聴聞修道士が、その若さと女性であるという理由でカトライを過少評価している点である。そこで、②の内容中、重要と思われる部分を、以下に引用したい<sup>(7)</sup>。

では、まず、カトライと聴聞修道士が神に到達する最も近い道についての会話をきっかけに、その後、言い争う場面。

彼女は言った。「父よ、私の永遠の救いに到達する最

も速い道を教えてください」。

彼は言った。「娘よ、満足していなさい」。

彼女は言った。「私の永遠の救いが保証されない限り、私は満足しません」。

彼は言った。「娘よ、あなたは永遠の命を確信できる」。

彼女は言った。「父よ、あなたは私に最も近い道を教えてくださいましたか」。

彼は言った。「被造物すべてが、あなたにそれを知らせている。それらすべてが『前へ進め。我々は神を利用しない。娘よ、あなたへの指示は充分です』と言っている」。

彼女は言った。「父よ、それは私にとって充分ではありません」。

彼は言った。「あなたが私を信じたくないのなら、われらの主イエス・キリストの言葉を信じなさい。主は言われた。『あなたの十字架を背負って、私に従いなさい』とは言わなかった。あなたは、それをこのように理解しなければならない。あなたが為しうることを為す限り神は満足される、と」。

彼女は言った。「私は為しうることを為しましたか」。

彼は言った。「あなたは、更に何をしたいのか」。

彼女は言った。「私は名誉と財産、友人と家族、そして被造物によって私に与えられうる全ての外的な快適さを離脱したい」。

ここで、聴聞修道士は言った。「私をも離脱したいのですか」。

娘は言った。「はい、父よ、私が全てのものを離脱しなければならぬとき、あなたをも離脱しなければなりません」。

彼は言った。「身のほどをわきまなさい。それは女には与えられない」。

彼女は言った。「私は女が天国に入ることが出来ないということを知っています。彼女らは、まず男になるべきです。それをこのように理解してください。彼女らは、男らしい行いを為さねばならないし、そして、男らしい心を十分な強さで持たねばなりません」。彼は言った。「今や、あなたはあなた自身を大変強いと思っている。あなたがこれまで以上に苦しむことができると思うということが、私には不思議だ」。

彼女は言った。「私は、キリストが私のために苦しんだ全てを苦しむことができます」。

彼は言った。「それは言うだけのことだ」。

彼女は言った。「私は真実を言っています」。

彼は言った。「あなたはそれをどのように私に説明する<sup>(8)</sup>のか」。

シュヴェスター・カトライの聴聞修道士は、以上の如く、霊の娘カトライに向かって「身のほどをわきまえなさい。それは女には与えられない(“Nitt ennim dich des an! Es ist frowen nitt gegeben.”)」と言うような人物であった。その言葉に対するカトライの答えは、当時の女性一般の平均的な考え方であったろう。曰く、「私は女が天国に入ることが出来ないということを、よく知っています。彼女らは、まず男になるべきです」。しかし、己が聴聞修道士をして「身のほどをわきまえなさい」と言わしめたカトライの姿勢にこそ、注目すべきであろう。己が救いのためには、尊敬する指導者である聴聞修道士から離脱することも辞さないというカトライの姿勢のラディカルさはどうだろう。カトライは、そのラディカルさに相応しく、この後、要約の⑤に記した如く、「神にな」るのである。その部分を以下に示したい。

聴聞修道士は娘のところに来て言う。「今、あなたがどのようなか私に言いなさい」

彼女は言った。「よくありません。天と地は両方とも、私にとってあまりに小さすぎます。」

彼は自分に対してもっと語るように、彼女に懇願する。

彼女は言った。「私はあなたに言うことが出来るようになつまらないことはなにも知りません」。

彼は言った。「お願いですから、何か話してください」。彼は愛によって彼女の同意を勝ち取る。そして

彼女は神の真実の覆いを取った状態についての神秘的で深い事柄について彼と語る。その結果、彼は言った。「このことは、すべての人には見たことも聴いたこともないことであるということを理解しなさい。私が自分自身で神の業について読むようにある司祭から学ばなかったら、それは私にとっても見たことも聴いたこともない事柄であったろう」。

彼女は言った。「それは困りました。私はあなたの人生であなたがそれを感得することを願います」。

彼は言った。「私はそれについて大いに感得しているということについて、あなたは知らねばならない。そのことを、私は私がミサで語ったことを私が知っているのとちょうど同じくらいよく知っている。しかし、私が人生でそれを学ばなければ、それは私にとって残念なことであるということを私は認める」。

娘は言った。「私のために神に祈ってください」。

そして、慰めは彼女に再び戻り、神を享受する。しかしその状態は長く続かない。彼女は再びドアに戻ってきて、彼女の尊敬する聴聞修道士を訪ね、そして言う。

「父よ、私と一緒に喜びなさい。私は神になりました」。

徳をもって、彼は返事する。

「神は、それをほめられます。すべての人々から離れて、あなたの合一に戻りなさい。もしあなたが神に留まるならば、私はあなたと一緒に喜ぶでしょう」。

彼女は聴聞修道士のあとに従って、教会の隅に行く。そこで、これまでに名づけられた一切のものを彼女が忘れるということが起こる。そして、彼女は彼女自身とすべての被造物から引き離される。それらのものは、彼女を教会から連れ出すに違いないからである。彼女は三日目まで横たわる。そして、彼女が確かに死んだと彼らは思う。

聴聞修道士は言った。「彼女が死んでいるとは私は信じない。(あなたは聴聞修道士が、彼女が埋葬されたときにそこになかったということを知りなさい)。彼らは出来るかぎりの方法で彼女を試した。しかし、魂が彼女の身体にあるかどうか、判断できなかった。それで、彼らは言った。「確かに彼女は死んでいる」。聴聞修道士は言った。「確かに彼女は死んではない」。

三日目に、娘は回復する。

彼女は言った。「ああ。哀れな私。私は再びここにいる」。

聴聞修道士はそこにいて、彼女に駆け寄り、そして彼女に言う。「あなたの経験を私に示しなさい。そして、神の真実を私に享受させてください」。

彼女は言った。「神は、私がそうできないことを知っ

ています。私は、私が感得したことについて誰にも話すことは出来ません」。

彼は言った。「今や、あなたはあなたが欲するあらゆるものを持っているのですか」。

彼女は言った。「はい、私は永遠の至福を与えられています。私はキリストが本性によって存在することを、恵みによって獲得しました。キリストは私を彼の相続人にしました。その結果、私は決してそれを再び失うことはないでしょう」。

彼は言った。「神がほめたたえられるように。親愛なる娘よ、今や、あなたはここに留まり、あなたの神に不正をしないように<sup>(9)</sup>」。

「父よ、私と一緒に喜びなさい。私は神になりました (Herre. froewent euch mitt mir. ich bin gott worden!)」。

これは、カトライの言葉の頂点である。先にもふれたように、『シュヴェスター・カトライ』をラテン語からゲルマン語に翻訳したオズワルドは、「最も衝撃的な箇所の衝撃を和らげようとした」らしいが、その最たる言葉が「私は神になりました (ich bin gott worden!)」であったことは、想像に難くない。しかし、この言葉と同じ言葉、また類似した言葉はエックハルトの言説にいくつも登場する。以下にそれを列挙してみよう。

まず、説教第12番より。

「神は私達が独り子になるために (daz wir der eingeborne sun sin)、その行いの全てを為すのである<sup>(10)</sup>」

次に、説教第22番より。

「私達は父が永遠に生んだ独り子である (daz wir der einiger sun, den der vater ewicliche geborn hat)<sup>(11)</sup>」

さらに、説教第25番より。

「私達が神と合一するように (daz wir vereinet werden mit gote)<sup>(12)</sup>」

最後に、説教第26番より。

「私達が真に子になる (daz wir in der warheit sun werden)<sup>(13)</sup>」

このように、カトライの言葉は、エックハルトの言葉であった。そのことを踏まえた上で、なお、今しがたの引用の末尾の聴聞修道士の言葉が重要である。彼

はカトライに向かって言っている。「今や、ここに留まるように (nu blib)」。カトライは、神との神秘的合一の極みで、現世の直中に留まるべきだというのである。これは以前にも拙論でしばしば引用した、ルカによる福音書10章38節以下のマルタとマリアの物語をめぐるドイツ語説教第86番の言説と一致する考え方である。その中でエックハルトは、マルタをしてこう語らしめている。「マリアが生きることを本質的に自分のものとするために、生きることを学ぶことを私は望んでおります<sup>(14)</sup>」。ここで、マリアは、カトライが体験したような神との神秘的な合一体験を体現する存在である。しかしエックハルトは、生業に従事して「生きることを」を重視するのである。『シュヴェスター・カトライ』の聴聞修道士の「ここにどまるように」という言葉には、そのように現世で生きることを重視したエックハルトの考え方に通じるものがあると我々は考えるのである。さらに、このことは、『シュヴェスター・カトライ』の最後の段落で一層明確になる。この『シュヴェスター・カトライ』の末尾もまた圧巻である。曰く、

娘は更に語り、神について話すために来た。彼女は、聴聞修道士が「親愛なる娘よ、一つ一つ話さない」と言ったほど、多く語った。娘は彼が気を失うほど多く、神の偉大さと力と摂理について語り、そして、彼は意識を回復する前に長い間横たわるべく保護された地下において助けられねばならなかった。意識を回復するとき、彼は娘を呼んで欲しいと、あせって人に頼んだ。そのように為され、娘は聴聞修道士のところへやって来て彼に向かって言った。「今は、ご機嫌いかがですか」。

彼は言った。「私は大変いいです。あなたを一人の人間としてお造りになった神は誉むべきかな。あなたは私を永遠の救いに導いた。私は神の観照に到達し、そしてあなたの口から聞いた全ての証明を、私は与えられた。おお、親愛なる娘よ、私は、今ある所に私が留まり得るよう、言葉と行いでもって私を助け給うように切に神に願ってくれる愛が、あなたにあるように切望する」。

彼女は言った。「そんなことはありえないと知りなさい。あなたは、それを受けるにふさわしくなっていま

せん。あなたの魂と魂の力が、農園に出入りする下男下女のように、上がり下がりする道に慣れるとき、そして、あなたが天使を、神がかつて永遠に造ったあらゆるものと区別することができるとき、そしてあなたがこのことについて何も不足していないとき、そしてあなたがあらゆるものを、どんな善き人が彼の下男下女について知っているよりもよく知っているとき、その時、あなたは神と神性の間の違いを認識するでしょう。今や、あなたは聖霊と聖霊性の間の違いを理解しなければなりません。ただ、そのときにのみ、あなたは永遠不変性を得ようと努力するでしょう。あなたは撤退してはなりません。それらが害われることなしに留まるので、それによってあなたが傷つけられないであろう被造物との活動を探求しなければなりません。こうして、あなたはあなたが狂わないような強さを引き出さなければなりません。このことをあなたは、魂の力が噴き出し、そして、あなたが私が以前に話した認識にいたるまで、結晶させなければなりません。われらの主イエス・キリストの甘い御名がほめたたえられますように。アーメン。<sup>(15)</sup>

ここに至って、聴聞修道士とカトライの立場は逆転している。今やカトライは、聴聞修道士を指導している。彼女は彼に「彼が気を失うほど多く、神の偉大さと力と摂理について語」ったのである。このように女性が男性を指導するということについては、これまたエックハルトに適切な言説がある。それはほかでもない、先ほど引用したドイツ語説教第86番である。エックハルトはその末尾で、女性の立場を重んじる発言を為しているのである。曰く、

「キリストが昇天し、彼女が聖霊を受けたとき、彼女はようやく奉仕の業を始め、海を越えて旅をし、説教し、教え、そして使徒達に奉仕する女、使徒達の洗濯女となったのである (Kristus ze himel gevuor und si den heiligen geist enpfienec, do vienc si allererst ane ze dienne und vuor iiber mer und predigete und lerte und wart ein dienaerinne und ein wescherinne der Junger<sup>(16)</sup> )。』

ここには、まだなお女性蔑視の風潮が強かった1300

年代のドイツにおいて、男性と同じように「旅をし、説教し、教え」る女性の立場に対する、エックハルトの肯定的な眼差しが顕著である。

次に、これもまた以前に拙論で引用した箇所であるが、『神の慰めの書』の最終段落も、女性の立場を擁護していると言えよう。

「異教の師であるセネカは言っている。『ひとは宏遠で卓越した事柄については、宏遠で卓越した心と、崇高な魂で以って論ずるべきである』と。また『このような教えを無学な人々に向って話したり書いたりすべきではない』という人もいることであろう。それに対して私は次のように言おう。もし学の無い人たちを教えるべきではないというのであれば、その場合には何びとたりとも教えを受けるといえることができなくなり、且つまた何びとたりとも教えたり書いたりすることができなくなるのだ、と。なぜかというと、学の無い人たちが学無き人であることから学の有る人になるために、ひとは学の無い人々を教えるのであるから。<sup>(17)</sup>」

エックハルト当時のドイツにおいて、女性は確実に「学の無い人たち」の中に入っていたであろう。だからこそ『シュヴェスター・カトライ』の聴聞修道士はカトライに向かって「身のほどをわきまえなさい」と言ったのであろう。しかし、今しがたの引用から明らかかなように、エックハルトには女性に対するそのような高圧的な姿勢は無い。

さて、件の聴聞修道士は正に「気を失」ったのであり、それが彼の神との神秘的な合一体験であった。「意識を回復」した彼は、「今ある所に私が留まり得るよう」に、すなわち神秘的合一の極みに「留まり得る」ことを願うが、カトライによって「そんなことはありえないと知りなさい。あなたは、それを受けるにふさわしくありません」と、きっぱりとその希望を退けられる。それに続くカトライの言葉はまた、エックハルトのドイツ語説教第86番の件の言葉に通じるところがある。カトライ曰く、「あなたの魂と魂の力が、農園に出入りする下男下女のように、上がり下がりする道に慣れるとき、(中略)その時、あなたは神と神性の間の違いを認識するでしょう」。「農園に出入りする下男下女のように、上がり下がりする道に慣れる」ことは、正に生業に従事して「生きることを学ぶ」ことに通じよう。さらにカトライは、今や己が弟

子となった聴聞修道士に対して、「あなたは撤退してはなりません。それらが害われることなしに留まるので、それによってあなたが傷つけられないであろう被造物との活動を探求しなければなりません。こうして、あなたはあなたが狂わないような強さを引き出さなければなりません。このことをあなたは、魂の力が噴き出し、そして、私が以前に話した認識にあなたが至るまで、結晶させなければなりません」と命じている。この徹底した「生きることを学ぶ」姿勢の強調は、エックハルトの思想の真髄に一致する。因みに、同じことを言っていると思われるエックハルトの言説を引用しておこう。曰く、「内面への沈潜、敬虔な祈り、甘美な法悦、あるいは神の特殊な恩寵の内にあるほうが、かまどの火のそばや、厩にいるよりも多くのものを得ることができるなどと思いを違えるならば、あたかも、神をとらえ、その頭にマントをかぶせて腰掛の下に押し込めてしまうようなものである<sup>(18)</sup>」。

## 結 論

我々は今回、「歪んだ鏡」であることを前提しつつ『シュヴェスター・カトライ』の本文に取り組み、その内容をエックハルトの言説と比較してみた。その結果、我々は以下の点において、この「歪んだ鏡」からエックハルトとベギンの実像を垣間見ることができたと考える。

まず、『シュヴェスター・カトライ』に登場する聴聞修道士がエックハルトの思想を正しく体現しているのではなく、むしろそれを体現しているのはカトライであるということは言えるであろう。見てきたように、「私は神になった」というカトライの言葉は、エックハルトの説教の言葉であった。カトライこそ、エックハルトであったのである。この点について、作家の古井由吉氏がその著『神秘の人びと』所収の「あたかも布の上に滴った油が」という文章の中で、次のように述べておられる。「例の告解聴聞者は無論エックハルトに擬されてはいない。エックハルトの教説を一部なりとも『体現』しているとするれば、それはカトライのほうである<sup>(19)</sup>」。古井氏はマルティン・ブーバー編の『神秘体験告白集』中の『論考「シュヴェスター・カトライ」より』を読んだだけで、以上のように書いてお

られるのであり、慧眼というほかない。我々は全文をつぶさに読み来ったが、期せずして古井氏と同じ結論に達したのである。

しかし、『シュヴェスター・カトライ』において、マイスター・エックハルトの実像が反映している場面もあつたのではなかろうか。それは、ほかでもない、我々も引用した最後の場面においてである。あの最後の場面において件の聴聞修道士は、全くカトライの弟子になりきっていた。これこそ、エックハルトの実際の姿ではなかったか。1314年から1323年まで滞在したシュトラスブルクでも、1323年以降、死の前まで滞在したケルンでも、異端と目されたベギンたちを正しい信仰に連れ戻すべくドミニコ会から命じられていたエックハルトは、ある時には、ベギンに自ら師事したこともあつたに違いない。故にこそ、エックハルトは最晩年において、異端審問にかけられる憂き目に遭つたのである。

この作品の前半における聴聞修道士とその霊的な娘の関係は、普通の教え教えられる者同士の関係であつた。そして、前半における聴聞修道士は、離脱の境地を望むカトライに対して、「身のほどをわきまえない。それは女には与えられない」と言つてのけるような、当時の一般的な男性の価値観の持ち主であつた。しかし、後半に至つて、この男の価値観は一変する。彼は、己が霊的な娘の指導を受け、彼女に執り成しの祈りを頼んでいるのである。この『シュヴェスター・カトライ』の展開には、エックハルトがドイツ語説教で説き来った、無学な者たちの立場に立ち、女性が説教し、教えることを由とする考え方が正しく反映していると言えよう。今や我々は、聴聞修道士とカトライのどちらがエックハルトの思想を体現しているかを、問うをやめよう。実は、両者共にこの物語が進むに従つて、ラインラント時代のエックハルトを体現していたのである。このように見てくると、結局、『シュヴェスター・カトライ』という作品は、伝説という様式ではあるが、ラインラントにおけるエックハルトの活動の全体を動的に描いた作品とすることができるであろう。それゆえ、エックハルトとベギンの思想は、異端視されたベギンを含めて、その相違点を問うことにはなじまず、動的に補い合った関係にあつたと見ることができるであろう。

註

- 1 井上ひさし著『パロディー志願』、中央公論社、1979年、39頁。
- 2 Robert E. Lerner, *The heresy of the free spirit in the later Middle Ages* Berkeley ; Los Angeles ; London : University of California Press, 1972, p.215 - 221, 232.
- 3 Barbara Newman, *From virile woman to woman Christ studies in medieval religion and literature Middle Ages series*, University of Pennsylvania Press, 1995, p.172.
- 4 同上
- 5 同上, p.173-174.
- 6 同上, p.173.
- 7 以下の私訳にあたっては、テキストとして Franz-Josef Schweitzer (Edition), *Der Freiheitsbegriff der deutschen Mystik : seine Beziehung zur Ketzerei der "Bruder und Schwestern vom Freien Geist," mit besonderer Rücksicht auf den pseudoeckhartischen Traktat "Schwester Katrei"* Frankfurt am Main ; Bern : P. Lang, c1981. を用い、次の英訳も参照した。edited by Bernard McGinn with preface by Kenneth Northcott, *Meister Eckhart, teacher and preacher*, Paulist Press, 1986.
- 8 Franz-Josef Schweitzer (Edition), "Schwester Katrei" S.323 - 324
- 9 同上, S.333 - 335.
- 10 Josef Quint, *Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke, die deutschen Werke, I*, Stuttgart : W. Kohlhammer Verlag, 1986, S.194.
- 11 同上, S.376.
- 12 Josef Quint, *Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke, die deutschen Werke, I*, Stuttgart : W. Kohlhammer Verlag, 1986, S.18.
- 13 同上, S.35.
- 14 Josef Quint, *Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke, die deutschen Werke, III*, Stuttgart : W. Kohlhammer Verlag, 1986. S.491. 翻訳は次のものを参照した。マイスター・エックハルト著、植田兼義訳、『エックハルト I』(キリスト教神秘主義著作集6)、教文館、1989、144頁。
- 15 Franz-Josef Schweitzer (Edition), "Schwester Katrei" S.369 - 370.
- 16 Josef Quint, *Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke, die deutschen Werke, III*, Stuttgart : W. Kohlhammer Verlag, 1986. S.492.
- 17 Josef Quint, *Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke, die deutschen Werke, V*, Stuttgart : W. Kohlhammer Verlag, 1987. S.60 - 61.
- 18 Josef Quint, *Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke, die deutschen Werke, I*, Stuttgart : W. Kohlhammer Verlag, 1986, S.91.
- 19 古井由吉著『神秘の人びと』、岩波書店、1996、156頁。
- 20 Martin Buber, *Ekstatische Konfessionen. Sammlung Weltliteratur : Serie 1, Reihe: Anthologien*, Verlag Lambert Schneider, 1984.